

## 戦いの地を食料の宝庫に開墾

静岡県浜松市の三方原<sup>みかたはら</sup>台地は、浜名湖の東側に位置する。戦国時代、徳川家康と武田信玄が激突した「三方ヶ原<sup>みかたがはら</sup>の戦い」が有名である。

従来この地域には河川が無く、明治以降、先人たちにより天竜川の水を引く利水工事が進められた。

約9000haの広大なこの台地は、戦時中には旧陸軍の飛行場と爆撃場として利用されていた。

1945年、この三方原に約600名が入植したが、開墾時に不発弾が爆発して死傷者が出る、という痛ましい事故も起きた。

この土地は強い酸性土壌の赤土で、耕作には不向きだとされていたが、団結を強固にして開墾を進めていった。土壌改良にも力を注いだ。

46年にホルスタインが導入され、土壌改良に一役買うと共に、酪農家も徐々に増えていった。

48年に三方原開拓農協が設立され、現在に至るまで、同開拓地の要としての役割を担っている。

55年頃からミカンの栽培が始まり、基幹作物の一つとなっている。

65年頃にはスイカ部会ができ、後の蔬菜部会となる。品種や生産管理の一元化や、他県へ技術研修などに出かけるなどして技術を磨き、高品質なスイカを生産し、市場評価は格別なものとなった。その後、ハウスによるメロンやトマトなどの栽培へと広がっていった。

現在でも、特産の「三方原馬鈴薯」をはじめ、大根、トマト、ミカン、メロンなど、多くの野菜や果物が生産されている。

組合結成30周年を記念して、78年に開拓之碑が、当時開拓農協のあった浜松市三幸町に建立された。その後、農協の事務所移転に伴い、浜松市北区豊岡町の現在の農協の前に移設されている。

開拓之碑には土質不良の開拓地の苦労が克明に刻まれており、入植以来の道程が偲ばれる。

農協の近くに、ファーマーズマーケット「土の市直売場」があり、とれたての農産物などを消費者に提供している。

## 三方原（みかたはら）開拓 22-135-1

①調査日 令和6年5月16日

②所在 静岡県浜松市北区豊岡町411

③地区の沿革 昭和20年（1945年）、三方原には600余名が入植し、三方原開墾機能組合が結成。開拓者の多くが農業経験に乏しかった。また、道路、水もなく、最初は雑穀や芋などの栽培から始められた。当初、堆肥作りのため落ち葉集めから始め、やがて家畜を導入により有機質肥料源として土づくりが進められた。

④設置年月日 昭和53年5月吉日

⑤設置者 三方原開拓農業協同組合  
組合長 鈴木五郎

⑥碑文（表面） 開拓之碑

⑦副碑（表面） 開拓碑之記

当開拓地は、土質不良の為古来農耕不適地として顧みる人もなく大正末年より僅かに飛行隊の爆撃場として使用されたのであります

大東亜戦争の敗戦により我国は国家崩壊の危機に曝されました。此の時に当り我等同志は、国の緊急開墾の要請に応え危機に瀕した国家再建の礎石たらんとして当地に入植し不毛の大地に敢然として開墾の鋤を打ち下ろしたのであります。尔来栄養失調状態にある瘦躯に鞭打ち気力のみを以て開墾に従事しましたが、千古、鋤を知らない不毛の地は頑として我等の努力を拒否し開墾は遅々として進まず同志の疲労と窮乏は益々其の度を加へた為に死亡者、脱落者続出しましたが後に残った同志は益々団結を強固にし初志の貫徹に邁進したのであります。其の後幾多の試行錯誤を繰り返し乍らも入植以来三十余年にして漸く中小家畜、柑橘、野菜等の産地として県下有数の地歩を占めるに至りました。

茲に於て同志相図り組合結成三十周年を記念し碑を建て険しかった入植以来の道程を偲ぶと共に次代を継ぐ若き人々の精神的支柱となることを祈念するものであります。

昭和五十三年五月吉日

三方原開拓農業協同組合 組合長 鈴木五郎

⑧現在の状況 三方原開拓農業協同組合の事務所移転と同時に事務所横に移設。